

少し足を延ばして

石川の歴史探訪



源氏ゆかりの地を訪ねて



道の駅 俱利伽羅源平の郷→竹橋口の歴史資料館:「火牛の計」のモニュメント

平維盛が平家軍を率いた俱利伽羅峠の合戦では、源義仲勢は数百頭の牛の角に松明をくりつけ平家軍を襲わせ、谷底(地獄谷)に落とされたという逸話「火牛の計」が残されています。

富山県小矢部市石動町では、毎年7月に重さ約700kgのわらで作った「火牛」が石動市街地を疾走するメルヘンおやべ源平火牛まつりが開催されています。

木曾義仲が俱利伽羅峠の戦いの 戦勝を祈願した埴生(はにゅう)護国八幡宮



現在の社殿は、江戸時代に加賀藩より寄進されたものとのことです(富山県小矢部市埴生)。参道左手には、昭和58年、源平俱利伽羅合戦800年祭の記念事業として建立された源(木曾)義仲の騎馬像がおかれています。俱利伽羅峠の富山県側の玄関口に位置する埴生護国八幡宮に隣接して、俱利伽羅源平の郷・埴生口(歴史国道案内休憩施設)が設けられています。富山県小矢部市桜町から石川県津幡町竹橋までの12.8キロメートルが「歴史国道 北陸道」として整備され、石川県側の玄関口には約1300年の歴史を持つ俱利伽羅不動寺があります。



俱利伽羅峠の古戦場の火牛(かぎゅう)



金沢駅 → 一般道 33分 → 道の駅 俱利伽羅源平の郷 → 一般道 12分 → 俱利伽羅不動寺 俱利伽羅源平古戦場 → 一般道 16分 → 埴生護国八幡宮
北陸自動車道小谷部-金沢東IC経由32分



俱利伽羅不動寺は、718年中国から渡来したインドの高僧、善無畏三蔵法師が俱利伽羅不動明王の姿を彫刻された尊像を、元正天皇の勅願により奉安された事が始まりとのことです(高野山真言宗 別格本山 俱利伽羅不動寺公式HP: <https://www.kurikara.or.jp/>)。1183年の俱利伽羅源平合戦では、お堂などが焼失しましたが、その後、源頼朝によって再興されました。江戸時代末期には再び門前の茶屋からの出火により山門や不動堂が焼失、その後、再建されないまま明治政府により廃寺となったものの、50年後の1949年に高野山の金山穆稻大僧正により、俱利伽羅不動寺として復興され、現在に至るそうです。

奥州を目指す源義経 尼御前岬に 残された物語



源義経は、屋島、壇ノ浦の合戦で平氏を滅ぼし武功をあげながらも、頼朝と対立し、朝敵とされ追われることとなりました。義経討伐の追手から逃れるため、義経一行は北陸路を越前から加賀に入り、奥州の藤原秀衡を目指しました。

尼御前岬という呼び名は、奥州に落ちのびる義経一向に同行していた尼御前が、すぐ先にある「安宅の関」の警備の厳しさを察し、足手まといになることを憂い、一向の無事を祈りながら、身を投げたという言い伝えに由来するそうです。



歌舞伎十八番 「勧進帳」の舞台 安宅の関



左から順に義経・弁慶・富樫銅像



安宅の関跡



白紙の勧進帳を騎む弁慶像



難関突破の神社としても知られる安宅住吉神社

[文・写真:遠藤]

「勧進帳」あらすじ

奥州平泉に逃れようと北陸路を進む義経一行が、山伏に扮して加賀国の安宅の関所を通り抜けようとしたところ、義経一行が山伏姿であると事前に伝えられていた関守の富樫に呼び止められてしまいます。武藏坊弁慶は東大寺再建の勧進(浄財集め)を行う山伏であると言い逃れようとするも、富樫は、弁慶に勧進帳(寄付集めの趣旨書)を読めと命令しました。弁慶は白紙の巻物を手に取り、勧進帳かのようにスラスラと読み上げましたが、不信任を募らす富樫はさらに弁慶に山伏についていくつも問いただしたところ、弁慶は見事に答えを返し、ついに富樫は義経一行の通行を許します。この時、義経は荷物持ちの姿をしていましたが、見張り番が、義経に似ていることに気付かず、再び引き止められました。すると弁慶はいきなり義経のせいでもたふされたのを察し、杖で打ちます。すでに義経一行であることを見破っていた富樫も、これには驚き、主君をそこまでして守ろうとする弁慶の心情を察し、通行を許可します。安宅住吉神社は、危機的な難を逃れた義経と弁慶の話にあやかって難関突破の神社としても多くの信仰を受けています。能の「安宅」と歌舞伎の「勧進帳」の舞台となった場所については諸説あり、富山県高岡市の小矢部川の河口を横断するための渡船であった如意の渡し(にょいのわたし)での伝承を元に作られたという説もあります。如意の渡しは2009年まで、運行され、近くには、義経を扇で打ちます弁慶の像が建立されていますが、その義経・弁慶像は2017年にJR伏木駅前に移設されました。